



私のふるさと

木村 宥子

2011年は東北を大震災と原発の爆発が襲った年。仙台には私の実家があった。住む者もなくなった家は震災の直前に取り壊してあった。

しかしもちろん、友人知人はたくさんおり、テレビや新聞で報じられる東北の様子は、どう想像したらよいか・・・恐怖としかいいようがなかった。みんなどうなっているのだろうか？道路も鉄道も寸断されているという。仙台の郊外に当たる荒浜にはすごい数の遺体が見られるという。もしかしたら荒浜の彼女もその中に入っているのでは？若林区一帯は海の水がさかのぼってきているという。親友のMさんの家は若林区だが・・・等々と。

私は知人の市議員に電話をした。議員なら情報が入っているだろうし、彼の家は高台だから水は来ていないだろうと思ったから。幸い電話が通じ、まだ被害の実態は分からないが、彼自身は家の中がめちゃくちゃになっただけでそれ以上の被害はなく、ある程度の必要な活動はできている。家はガス以外、水も電気も問題ないという。地震の直前、家中オール電化にしていたため風呂が沸かせるので、朝から近隣の被災した人々に風呂を提供しているという。

そこで彼を通じて必要な品物を集めて届けることにした。彼は毎日「〇〇とXXが必要な人がいる」「どこそこでこんなことが起きている」などと連絡をくれた。私は友人知人に頼んで、必要な物資を提供してもらって送った。「奈良・人と自然の会」の方々にもずいぶん協力していただいた。心からありがたく感謝申し上げます。協力してくださる方の輪が広がり、最終的に私だけで段ボール箱約40個、皆さんが送ってくれたものを含めるといくつになるのだろうか。現地でもそれらを必要ところに配分してくれ、ちゃんと役に立ったようである。同時に彼の情報を新聞にして皆さんに読んでもらった。これ

は考えた以上に東北と奈良をつなぐのに役に立った。

私は今も毎年3月になると三陸のわかめを共同購入している。「奈良・人と自然の会」の方々にもたくさん買っていただいているが、初めは気仙沼湾で養殖をしていたSさんのわかめだった。しかしこの震災で気仙沼湾は大火に包まれ、Sさんは4隻あった船を全部失い廃業を決めた。共同購入は養殖業に携わる方々の支援を兼ねて今も続いている。

私が仙台に帰れたのは震災から1年以上たってからだった。帰るのがどうにも怖かったのだ。仙台はさすがに生活も元に戻りつつあったが、石巻、気仙沼あたりは、まだ家に船が突き刺さったままだったり、海の中に老人施設が沈んでいたりだった。そこにいた人たちが今もそのままいるのではないかと錯覚するような光景があった。仙台から海岸線を南下、山元町に入ると海辺にはすばらしい小学校がある。教室は海に向かって大きく窓があり、こんな所で勉強したらどんなに気持ちがいいだろうと思われた。しかし一階には大量の砂、体育館の天窗を突き破って松の大木が根を付けたまま突っ込んでいた。山元町を過ぎたあたりに通行禁止の看板があった。そこから先は原発の汚染地域になるのだ。

別の機会に福島県飯館村を訪れた。原発からは遠く離れているのに高濃度汚染地域になった村だ。ちょうど政府によって田の除染(?)がされていた。防護服の作業員が、田を40cmほど掘り返して裏返しにするという。放射能は30cmしかしみ込まないし、稲の根の深さは6cmだから、40cm裏返せばまた稲作ができるという理屈だ。しかし2年後、その田は放棄されていた。

女川町から奇跡的に電源喪失を免れた原発、女川原発へ向かう山道には大きな岩が多い。そのうちの一つに、海に向けて般若心経が大書されていた。それは怒りと祈りを込めた嵐のような文字であった。